

編集後記

この場において、個人的な感慨にも似たことから書き出すことがふさわしいかどうか心許ないところがあるが、最近のテレビ放送におけるプロ野球の位置の低下は、長嶋、王というスーパースターに憧れ、野球放送に熱狂していた自分の少年時代を思い起こすと隔世の感がある。その一方で、イチロー、松井、松坂をはじめとして、大リーグに関しては、衛星生中継はもとより、どのスポーツニュースにおいても取り上げられないことはない。

こうした事態を説明する仕方はさまざまにあるであろうが、「スポーツにおけるグローバリゼーションの進展」と理由づけることについては大方の賛意が得られるであろう。とはいえ、このことで何か分かったような気にはなるが、事はそれほど単純ではなく、そのままではブラックボックスのような部分も少なくない。ここに、さまざまな視角からの研究が求められる所以があろう。

われわれの共同研究が、現代のスポーツの変容に対するグローバリゼーションの影響力にいち早く注目してきたと自負するものである。「はじめに」にも記されているように、これまでの研究年報において「グローバリゼーション」を研究視角とする成果を積み重ねてきた。それを基盤として、メンバーが個々に成果を公にし、また、共同して著作（『越境するスポーツ - グローバリゼーションとローカルティ』、創文企画、2006）を出版した。

こうした経緯をふまえつつ、今回のテーマタイトルについて、若干、補足的な説明をしておこう。

従来テーマタイトルが、「グローバリゼーション（グローバル化）」と「ローカリゼーション（ローカル化）」というそれぞれのプロセスを、やや並立的にとらえている印象を与えるくらいがなくもなかった。いうまでもなく、共同研究においては、グローバル化とローカル化の双方を構造的にとらえようと努め、相互のプロセスにおける「規定し、規定し返す」というダイナミックな側面を探求してきた。今回は、そうした研究視角を表現する用語として「交点」を付したことになる。

今回の年報について、もうひとつ記しておきたい。2006年度、月例研究会で大学院生の発表を1、2回程度組み込むことが研究部方針として提起され、全体の承認を得た。この方針に基づき院生の発表が行われ、今回の年報ではその発表に基づく原稿が掲載されている。

最後に、関根助手と渡辺助手の編集実務をはじめとする有形無形のサポートによって、ここに今年度の研究年報の完成を見た。記して謝意を表したい。
(研究部長・尾崎 正峰)

一橋大学 スポーツ 研究

Vol.26

スポーツのグローバル化とローカル化の交点

2007年10月1日 発行

編集・発行 一橋大学スポーツ科学研究室
〒186-8601 東京都国立市中2-1
042-580-8270

www.rdche.hit-u.ac.jp/~sports/
